

海軍

海兵团に志願して入団

山形県 公平 好一

私は大正十三（一九二四）年六月十八日、山形県西村山郡本郷村と言う農村に生まれました。父親は公平由松で、約一町歩の水田を耕作し村では中流の農家でした。

私は尋常高等小学校を卒業して、農業を手伝いながら村の青年学校に通いました。当時の米作りはすべて手作業で、八十八の手がかかるから米と言う字は八十八と書くのだと教えられました。田植えをするにも田の草取りをするにも、また秋の稲刈りをするにも全部腰を曲げて朝から晩まで働

くから若い者でも腰痛に悩まされました。

動力としては牛か馬を飼い馴らして田の耕起や代かき作業には無くてはならない動力でした。我が家では牛を大事に飼っておりました。肥料は現在のように化学肥料は無く、大豆の油を絞った大豆粕とか魚粕などが貴重な肥料でした。それでも一反歩（十アール）から七俵や八俵の収穫を得ておりました。

満州事変、続いて支那事変と年ごとに戦争が拡大して、昭和十六（一九四一）年十二月八日にはついに日米開戦となり、国民の生活必需物資はすべてが配給統制となり、街へ出ても米屋、魚屋、呉服屋、煙草屋に至るまで店という店は全部閉店して殺風景な有様でした。

青年学校は勉学は何も無く、出征兵士の留守家庭の農作業の手伝いとか銃剣術の教練とか、すべて戦時一色となりました。そんな中であつて我が家では第三人、妹三人が次々に生まれて働き手がありましたので、私は昭和十九年海軍を志願しました。農家の長男が船になど乗つたこともないのになぜ海軍を志願したのか、七つぼたんに憧れたのか、自分にも分かりませんが、志願したら甲種合格となり、昭和十九年二月五日、舞鶴海兵団に入団致しました。

うわさには聞いておりましたので多少の制裁は覚悟して入団したのですが、鳴きまねから鶯の谷渡りなど、さらに肉体的苦痛を伴う制裁として精神手入れ棒と言う櫂の棒で思っきり尻を叩かれると赤く腫れて歩くのに大変苦痛でした。また尻の皮がむけて痛くて風呂に入れないことも度々でした。

そんな苦痛の三カ月の教育期間も終わつて、昭和十九年五月には西舞鶴の防備隊に一時入隊と

して一カ月入隊させられました。防備隊に入隊しても制裁は相変わらずでした。『人も嫌がる軍隊に志願で出てくる馬鹿もある』国家のためとは言いながら、古兵の、なにげなく口ずさむ鼻歌が志願兵の私には皮肉に聞こえたのも、このころでした。

六月に入つて横須賀海軍航海学校に入学して航海術を習いました。運用科では練習艦に乗つて魚雷攻撃等に対応する応急操舵の実習等を何回もさせられました。

三カ月の実習が終わつた昭和十九年九月に航海学校を卒業して原隊の舞鶴海兵団に復帰しました。バット回収と言つて、いわゆる精神手入れ棒と言う櫂の棒を隠し持つている者から取り上げて集め、それを廃棄する任務を命ぜられました。そして集めたら一人で二本も三本も隠し持つている古兵もおりました。中には折れた棒まで大事に隠し持つている古兵もおりました。

昭和十九年十一月、上等水兵に進級し、西舞鶴

において新たに部隊編成となった第三三五設営隊佐々木部隊に配属となりました。部隊長は海軍大尉佐々木進殿でした。

十二月に入って京都府福知山市石原と言う所へ部隊ごと移駐しました。任務は昼夜突貫工事で飛行場を建設せよとの命令でした。スコップとツルハシが主な用具で、大半はモッコを担いで土を運ぶ、ブルドーザーは超小型のもので馬力も小さく作業はなかなかはかどらなかつたようです。私は部隊本部勤務となり、主に事務系統の仕事でしたので飛行場が完成したかどうかは分かりません。

昭和二十年四月に名前は思い出せないがある部落に移動して仮兵舎を作る作業に従事させられました。バラック建築で屋根の上にザラ板と言う一センチ厚さの板を張って、その上に砂をかぶせて偽装します。敵機の空襲に備えるための工事した。

昭和二十年七月、富山県高岡市守山に移駐しました。八月一日富山市が米軍のB29の大編隊による空襲を受けて焼野原となりました。部隊の駐留

地から真つ赤になって燃え盛る市街地の様子が手に取るように見えましたが、対空兵器の無い我々は悔し涙で見つめるばかりでした。国民の生命財産を守るべき軍隊が国民の危機を見過ごす悔しさ、このときほど戦争を身近に感じたことはありません。

また同時に強く敗戦を意識させられました。大量の近代兵器の前に日本軍の無力な姿を国民に見せつけたと言っても過言ではありませんでした。

八月十五日天皇陛下の重大放送があると言われて兵舎で部隊全員がラジオの前に正座して聞きましたがガーガーピーピーと雑音だけで聞き取れませんでした。部隊長がどこかで聞いてきて戦争は終わった。日本は無条件降伏だと知らされましたが、今後どうなるかよりも戦争が終わったことにホッとした気持ちでした。みんな喜んで家へ帰れると思っていたら、私は残務整理を命ぜられて兵器や衣服や什器に至るまで、帳簿と員数を照らし合わせてトラック三台で大きな倉庫へ運び込む作

業に取り掛かりました。

現物と照合して驚いたことに、何一つ員数と合う物が無い。特に自転車やリヤカーのような民間の必需品は現物がほとんど無い。ゴム長靴などは破れた物しか残っていない。スコップ等も半数ぐらいしか無いので止むなく帳簿を現物に合わせてどうにか残務整理を終了しました。

昭和二十年九月二十四日、白米一升と鮭の缶詰五個を支給されて除隊となりましたので、富山県高岡駅から汽車にりましたが窓ガラスは一枚もなく、乗客は窓から出入りする有様でした。

途中空腹のため新潟県直江津駅で途中下車して駅前の旅館に米と缶詰を差し出して一泊を頼んだら大喜びで泊めてくれました。米は金銭よりも貴重品だったので。部隊を出る時旅費の支給はあったかどうか思い出せません。

翌日、昭和二十年九月二十五日、我が家に帰りました。父母は涙を流して喜んでくれました。

復員してからは家族みんなで働け働けの毎日で

した。二十五歳で隣町から嫁を迎えて、長男、次女、三女と子宝も授かって、現在は可愛い孫も二人もおります。終戦後六十一年もの平和な人生は本当に有り難く何よりも貴重なものだと思感謝しながら共に苦労を重ねた老妻と子ども余生を楽しく過ごしております。

何一つ不自由の無い世の中で、平和ですべての物があふれて出回っている。「もったい無い」と言う日本語が云々と新聞やテレビで報じられる時代となりました。これも根幹に平和の賜物があればこそと思っております。